

2時間で学ぶ英語の歴史

Let's Learn the History of English for Two Hours

横 山 利 夫

Toshio Yokoyama

山形県立米沢女子短期大学

『生活文化研究所報告』

第44号 抜刷

2017年3月

2時間で学ぶ英語の歴史

Let's Learn the History of English for Two Hours

横山利夫
Toshio Yokoyama

要旨：アングロサクソン人がブリテン島に渡ってきてから、近代英語までの変化について、わかりやすい言葉で、簡潔に説明した。「2時間で学ぶ英語の歴史」という題名にしたのは、以下の文章を一気に読んで、英語の歴史について概略を理解してほしいと思うからである。また、読者が古英語と中英語の語形変化を理解しやすいように、具体例を付表に示した。

キーワード：アングロサクソン人、デーン人、ノルマン人、古英語、中英語、初期近代英語、古ノルド語、ノルマンコンクエスト (Norman Conquest)

1. はじめに

英語の歴史は現在のデンマークからドイツ北部に住んでいたジュート人 (Jutes)、アングル人 (Angles)、サクソン人 (Saxons) が西暦449年にブリテン島に渡り、先住民族のケルト人を追い払って定住したことに始まる。(注1) それから1500年以上を経て、今日の姿に変化してきた。

英語の歴史を扱う場合、4つの時代に分けて考えることが一般的に行われている：

古英語 (Old English) 449年から1100年頃 (または1150年頃) までの英語

中英語 (Middle English) 1100年頃 (または1150年頃) から1500年頃までの英語

近代英語 (Modern English) 1500年頃から1900年頃までの英語 1500年頃から1650年頃までの英語を特に初期近代英語と呼んでいる。

現代英語 (Present-day English) 1900年以降の英語

2. 古英語

現在のイギリス人の祖先であるアングル人やサクソン人 (以下、アングロサクソン人と呼ぶ) がブリテン島に渡来したのは5世紀半ばであり、これがイギリスの始まりで、英語の始まりである。ただし、実際に文献記録が残っているのは7世紀末以降からである。1066年にブリテン島はノルマン人に征服され、その影響が言語に現われる1100年頃 (あるいは1150年頃) までの英語を古英語 (Old English) またはアングロサクソン語と呼ぶ。

古英語にはノーサンブリア方言 (Northumbrian)、マーシャ方言 (Mercian)、ウエストサクソン方言 (West Saxon)、ケント方言 (Kentish) があり、その分布はだいたい図1のようであった。ノーサンブリア方言とマーシャ方言の区域にはアングル人、ウエストサクソン方言の区域にはサクソン人、ケント方言の区域にはジュート人が定住していた。これらの方言のうち、現在まで伝えられているのはウエストサクソン方言で書かれた文献が多い。

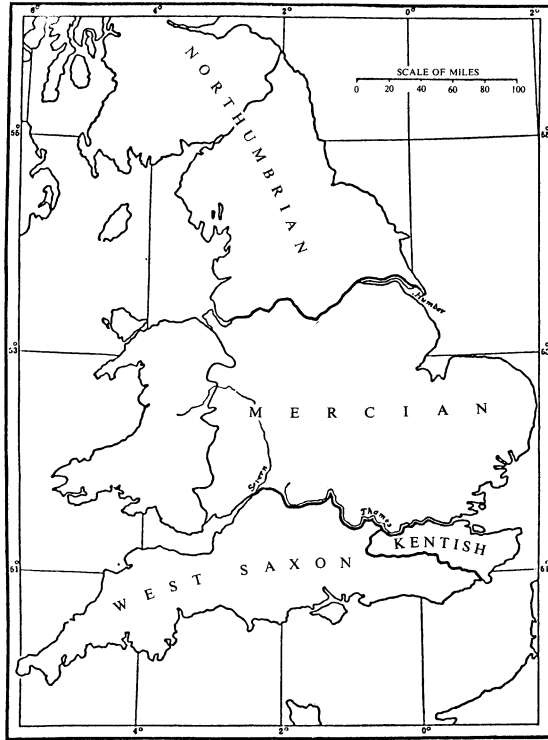


図1 Buck (1991,p.22)

The Dialects of Old English

2. 1 古英語の文字

アングロサクソン人が大陸にいるときはルーン文字と呼ばれる独特の文字を用いていたが、これは角張った字体で、碑文や装飾用に用いられていた。(図2) 6世紀後半にキリスト教がブリテン島に伝えられ、それとともにローマ字 (Roman alphabet) がもたらされた。一方、ローマ字では表記できない音を表すためにルーン文字なども用いられた: Þ (名称はソーン 'thorn'), ð (dに横棒を入れた形で、名称はエズ 'eth'), どちらも音価は [θ,ð] を表す。pに似た文字で 'wynn' と呼ばれる文字があり、その音価は [w] であり、また、æ (aとeの合字で、アッシン 'ash' と呼ぶ) の音価は [æ] であった。

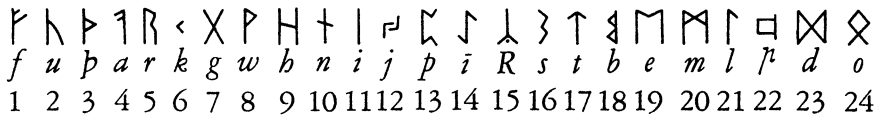


図2 宇賀治 (2000, p.126)

2. 2 古英語の発音

古英語では原則として綴り字どおりに発音すればよい。例えば、writan(write) [wri:tan] (注2)、cnāwan(know) [kna:wan] であったが、同じ文字が複数の音を表すことがある。① fは普通 [f] と発音されたが、母音と母音の間、あるいは母音と有声子音の間では有声音 [v] を表した。例として、frēond(friend)は [f] で、heofon(heaven)は [v] であった。

- ② c は [k] と発音されたが、前舌母音の前では口腔の前寄りの位置で発音され [ç] と発音された。cuman(come) [kuman], cirice(church) [çiriçe] など多くの単語がある。
- ③ g は、子音の前、および語頭で後舌母音の前では [g]、前舌母音の前では [j] を表した。grētan(greet) では [g]、gēar(year) では [j] である。
- ④ h は前後の音によって [h]、[ç]、[x] と発音された。hwæt [hwæt]、niht [niçt]、genoh [jenox] などがその例である。
- ⑤ sc は [ʃ]、cg は [dʒ] という発音で、scip(ship) [ʃip]、secgan [sedʒan] など使われている。

2. 3 古英語の語形

古英語は語と語との文法的な関係を、主に語尾の屈折変化(inflexion)で表した。古英語の屈折変化について説明すると以下のようになる（具体例については付表を参照）。

名詞

古英語の名詞の屈折変化については、性(gender)、格(case)、数(number)の区別がある。

名詞の性はドイツ語と同様に、男性、女性、中性の3つがある。これらは文法的性である。たとえば、stān(stone)は男性、hand(hand)は女性、wīf (wife) は中性である。

名詞の格は主格(nominative)、対格(accusative)、属格(genitive)、与格(dative)がある。主格は主語の格で、対格は直接目的語の格、属格は所有格、与格は間接目的語の格である。

名詞の数は単数(singular)と複数(plural)である。

名詞の変化はこれら性、格、数によって変化する。変化の様式は①強変化、②弱変化（変化の「強・弱」は語尾の種類が多いグループ、少ないグループと考える）、さらに、③その他の変化に区分される。

形容詞

古英語の形容詞も名詞と同様、性、格、数によって変化し、強変化と弱変化がある。その用法は次のようになる。

- ①強変化は形容詞が定冠詞や指示代名詞などの付かない名詞を単独に修飾する場合、あるいは述語として用いられる場合に用いられる。
- ②弱変化は形容詞が定冠詞や指示代名詞などの後に来る場合に用いられる。

具体的な例を挙げると次のようになる。

①の例文：wīsne wer(wise man) 男性・単数・対格

②の例文：þone wīsan wer(the wise man) 男性・単数・対格

代名詞

代名詞としては人称代名詞と二種類の指示代名詞(sē 'that,the' と þes 'this'), そして、疑問代名詞などがある。古英語の人称代名詞には単数と複数の他に、「われわれ二人」、「あなたがた二人」のように「二人」を強調する場合に用いられる両数があった。

動詞

古英語の動詞は主語の人称、数、時制、そして、法(mood)に応じた変化をする。時制は現在と過去、法は直説法、仮定法、命令法がある。変化の型は強変化と弱変化である。強変化は過去形、過去分詞形をつくるのに現代英語の不規則動詞のように語幹の母音を変化させる。弱変化動詞は現代英語の規則動詞の原形で、-(e)de/-ode、-(e)d/-odを付けて、過去形、過去分詞形をつくる。このほか、be動詞、助動詞など少数の語は特別な変化をする。

2. 4 古英語の語順

古英語の語順は現代英語の語順「主語—動詞—目的語」より自由であった。現代英語では

The king killed the bishop.とThe bishop killed the king.では意味が異なるが、古英語ではSe cyning sloh þone biscopとÐone biscop sloh se cyning.は主語と目的語を入れ替えてあるが、意味は同じである。冠詞seは主格で冠詞þoneは目的格であるから、se cyning が主語で、þone biscopは目的語であることが明示されており、語順が違っていても意味は変わらない。

2. 5 デーン人によるブリテン島への侵攻

8世紀後半になるとイングランドは北欧のデーン人（またはバイキングと呼ばれる）の大規模な攻撃と略奪を受けることになった。

最初は少人数のグループからなるバイキングが小さな船でやってきて、東海岸の町や修道院などを攻撃した。次第に、大きな集団でやってくるようになり、自分たちが定住する土地を求めようになった。851年には、カンタベリーとロンドンを制圧し、支配する領土を広げていった。870年までにはウエセックス(Wessex)を除く領土を支配下に置いた。ウエセックスの王、アルフレッド(Alfred)は必死にデーン人の攻撃に耐えて、878年にデーン人との間で条約を結んだ。その条約によって、イングランドはチェスター(Chester)とロンドン(London)を結ぶ線で2分割され、西側はアルフレッドが支配するウエセックス、東側はデーン人が支配する地域となった。デーン人の支配する地域はデーン法地域(Danelaw)と呼ばれ、デーン人の法律が適用された。また、その条約にはデーン人がキリスト教に改宗することも含まれていた。

アングロサクソン人とデーン人は領土を確定したが、その後も争いは続いたようである。1016年から1042年までの26年間イングランド全土がデーン人の支配下に置かれた。

2. 6 デーン人の言葉(Old Norse)と英語

デーン人の話す言葉は古ノルド語(Old Norse)と呼ばれた。古ノルド語は北ゲルマン語派に属し、西ゲルマン語派に属する英語と近い関係にあり、アングロサクソン人とデーン人がお互いの言語を覚えることはそれほど大変ではなかった。デーン人の支配する地域にも多くのアングロサクソン人が住んでおり、二つの言語を話す人も多くいたであろう。古ノルド語から多くの単語が英語に取り入れられた。以下に、古ノルド語から英語に取り入れられ、今も使われている単語の一部を挙げてみる。

egg, get, give, guess, leg, race, skill, skirt, some, though, weak

また、人称代名詞の三人称複数を表すthey, their, themが古ノルド語から借用された。

3. 中英語(Middle English)

中英語について説明する時にノルマンコンクエスト(Norman Conquest)について触れる必要がある。11世紀前半、イングランドはノルマンディー(Normandy)と良好な関係にあり、その当時の英国王エドワード(Edward)はノルマンディーの支配者ウイリアム公(Duke William)と仲が良かった。エドワードには後継ぎがいなかったので、彼の死後(1066年)、ウイリアムはエドワードと王位継承について約束があり、自分がイングランド王になると宣言した。他にも王位を要求する者がいたが、ウイリアムが率いる軍隊が戦いを制した。1066年のクリスマスの日、ウイリアムはウイリアム1世として即位した。ノルマン人によるこのイングランド征服がノルマンコンクエストと呼ばれている。

この征服によってノルマン人が主要なポストを占めることになり、政治・行政においてはフランス語が使用された。英国人は日常生活では英語を話したが、立身出世のためにはフランス語を修得しなければならなかった。このような状況は1350年くらいまで続いた。

しかしながら、英国がフランスと戦争状態（百年戦争：1337年～1453年）になり、敵国語であるフランス語が嫌われるようになった。ペストの大流行によって、国民の3分の1が死亡し、労働者が足りなくなりフランス語を話せない英国人も重要なポストに就くことができた。また、ノルマン人による征服以降、詩や物語はフランス語で書かれることがほとんどであったが、1300年頃から英語で作品を書く人も現れ、その中でもジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer)の作品は英語に高い評価を与えることになった。以上のようなことが英語の復活に大きな役割を果たした。

3. 1 中英語期に起こった主な変化

1 文法の変化

古英語には多くの屈折語尾があったが、中英語期にそれらのほとんどが消失し、語尾が単純化した。(具体例については付表を参照)

このことによって、文法関係を示すのに語順がそれまで以上に重要になった。

2 語彙の変化

ノルマン人による征服以降、フランス語からおびただしい数の借入語が英語に入ってきた。その数は約1万語、そのうち7500語くらいが現代英語に残っているとされる。それらの語彙の範囲は政治・法律・軍事から芸術・料理・ファッションなどと幅が広い。次に、少し例を挙げる:parliament,justice,army,music,dinner,dressなど。また、宗教的・学術的な語彙がラテン語やギリシャ語から取り入れられた。library,immortal,discussなどはラテン語から、Bible,demon,climateはギリシャ語からの借入語である。

3. 2 中英語の方言

古英語には4つの方言があり、その1つがマーシャ方言であった。中英語ではそのマーシャ方言が2分割され、中東部方言 (East Midland) と中西部方言 (West Midland) となった。その他には、古英語のノーサンブリア方言から発達した北部方言 (Northern)、ウエスト・サクソン方言から発達した南西部方言 (Southwestern)、古英語のケント方言から発達した南東部方言 (Southeastern) の5つの方言があった。

それらの方言の中で、15世紀までに中東部方言が標準英語の地位を確立していった。その理由として、次の3つが挙げられる：

- ①その地域にはロンドン、オックスフォード、ケンブリッジの3都市が含まれ、人口も他の地域より多かった。
- ②ジェフリー・チョーサーが英語で詩を書いたが、その時用いたのが中東部方言であり、中東部方言は書き言葉として全国に広まった。次にチョーサーのcantabery物語の序文から最初の数行を引用する。

Whan that April with his showres soote
The droughte of March hath perced to the roote,
And bathed every veine in swich licour,
Of which vertu engendred is the flour;

- ③1476年、キャクストン (Caxton) がロンドンで本の活版印刷を始めたが、活字を組むときに用いたのが中東部方言であった。

4. 初期近代英語

初期近代英語とは1500年頃から1650年頃までの英語である。その時代にはウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare,1564-1616)が多くの作品を書いた。また、ジェームズ1世 (James I : 在位1603-25) の呼びかけで学者たちが聖書翻訳にとりかかり、7年がかりで欽定訳聖書として完成した。それはヨーロッパではルネサンスの時代であり、大航海の時代でもあった。ヨーロッパ人が初めて日本にやってきたのも、この時代であった。ヨーロッパではまたキリスト教会がカトリックとプロテスタントに分裂した。

この時代で最も重要なことは本の印刷である。それまでは一字一字手書きであったので、本はとても高価であった。手書きの場合は同じ本を写すにしても、つづりの違いや、方言の違いなども生じたが、印刷本はどれも全く同じである。この時代は庶民が教育を受けるようになった時代でもあった。印刷本を見て、人々は印刷本で使われているつづりや文が標準的なものと考え、使用するようになった。

中世の時代には重要な文書はラテン語で書かれていたが、この頃から英語が用いられるようになった。しかしながら、英語には語彙が少なく、ラテン語やギリシャ語などから多くの言葉が借用された。education, scientific, chemistry, expensive, museumなどはその一部である。

4. 1 つづりと発音

最初の本が印刷された頃、英語のつづりと発音はほぼ一対一の関係で非常に使いやすかったが、今の英語はどうであろうか。英語のテストに発音問題が出題されることから分かるように、現代英語の母音のつづりと発音が必ずしも一対一の関係になっていない。たとえば、break, sea, deadのeaは[ei],[i:],[e]となるし、cool, flood, goodのooは[u:],[ʌ],[u]になる。このような複雑な音とつづりの関係を理解するには大母音推移(Great Vowel Shift)などの音変化について知る必要がある。

4. 2 母音の変化

大母音推移(Great Vowel Shift)

この音変化は次のように説明できる。中英語の強勢ある長母音が舌の位置を1または2段高め、元来最も高い位置の[i:]と[u:]は[ɔi]と[əu]に2重母音化した。この変化は1400年頃から1700年頃にかけて起こったきわめて規則的な変化である。大母音推移によって起きた変化は以下ようになる。

ME[i:]→[ɔi] (→[ai])	five, mine, time, wife
ME[u:]→[əu] (→[au])	down, house, town, now
ME[e:]→[i:]	sweet, three, cheese, green
ME[e:]→[i:]	heat, reach, meat, each
ME[o:]→[u:]	boot, pool, prove, choose
ME[ɔ:]→[o:] (→[ou])	boat, road, home, stone
ME[a:]→[e:] (→[ei])	safe, take, name, age

()内の変化は大母音推移以後の変化である。

その当時、イングランドの人々は上記のような発音の大変化が起こっていることは知りませんでした。なぜ、このような変化が起こったのでしょうか。それは誰にもわかりません。

その他の母音・子音の変化については説明を省きます。

4. 3 助動詞do

現代英語ではDoes she eat bread? She does not eat bread. She does eat bread.のように疑問文、否定文、強調文などで助動詞do(does)が用いられる。このdoの用法は近代英語（17-18世紀）になって確立したが、初期近代英語では上記のようにdoを用いる例と用いない例、つまり、Eateth(Eats) she bread? She eateth(eats) not bread. とが共存していた。

4. 4 つづり字 (iとj,uとvの区別)

本来,jはiを長く書いた文字であり、両者の区別はなかった。同様にuとvも同じ文字であった。例：uponとvpon, everyとeuery, majestyとmaiesty, joyとioy. 母音のi,子音のjの区別、そして、母音のu,子音のvの区別は16世紀に始まり、17世紀半ばに一般的となった。

4. 5 ラテン語つづりの影響

現代英語のsalmon,receipt,debt,doubt,islandには発音されない黙字が含まれている。それらの語は初期近代英語ではsamon,receite,det,doute,ilandであったが、その語源となるラテン語のsalmonem,recepta,debitum,dubitum,insulamに合わせて変えたためである。

5. 近代英語

英国は17世紀後半から、北米、ジャマイカ、インド、南アフリカ、さらには、カナダ、ニュージーランド、オーストラリアなどを植民地にして領土を拡大していった。

18世紀半ばから始まった産業革命によって英国の工業化は急速に進んだ。この革命は英国に強大な富をもたらし、世界最大の帝国となった。植民地の拡大と共に、英語も世界の言語となっていった。数多くの科学的発見がなされ、この世の中は一定の法則によって支配されていると人々は考えるようになった。文法家たちは英語の語法・文法に対しても、「かくあるべし」といったような規範的な立場を取った。これは現代の文法家たちが、現実に使用されている言葉を客観的に観察し、分析しているのとは全く対照的な立場を取っていたことになる。

では、正しい英語かどうかの判断はどうしたらいいのであろうか。それは、ほとんどの教養のある英語話者が日常的に使っているかどうかである。学校ではIt is Iが正しいと教わるが、教養のある人たちがIt is meと言うのだから正しいのである。

注 1

英語の成立以前のことに関しては、紙面の都合で本書では扱わない。下記の図書を参考にしてほしい。

Buck, G.,(1991) *The History of the English Language in Simplified English*. 英潮社 (やさしい英語で書かれている)

児馬 修(1996)『ファンダメンタル英語史』ひつじ書房 (英語史の基礎的なテキスト)

家入葉子(2007)『ベーシック英語史』ひつじ書房 (説明が理解しやすい)

宇賀治正朋(2000)『英語史』(現代の英語学シリーズ8) 開拓社 (説明が詳しい)

注 2

本章では、長母音の上にー(macronと呼ぶ)を付して短母音と区別した。

付表：古英語・中英語の語形変化

1. 名詞

(i) 強変化

男性名詞：古英語stān>中英語stoon(stone)

	<単数>		<複数>	
	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	stān	stoon	stānas	stoones
属格	stānes	stoones	stāna	stoones
与格	stāne	stoon	stānum	stoones
対格	stān	stoon	stānas	stoones

女性名詞：古英語talu>中英語tale(tale)

	<単数>		<複数>	
	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	talu	tale	tala	tales
属格	tale	tale	tala	tales
与格	tale	tale	talum	tales
対格	tale	tale	tala	tales

中性名詞：古英語scip>中英語ship(ship)

	<単数>		<複数>	
	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	scip	ship	scipu	shipes
属格	scipes	shipes	scipa	shipes
与格	scipe	ship	scipum	shipes
対格	scip	ship	scipu	shipes

(ii) 弱変化

男性名詞：古英語nama>中英語name(name)

	<単数>		<複数>	
	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	nama	name	naman	names
属格	naman	names	namena	names
与格	naman	name	namum	names
対格	naman	name	naman	names

(iii) その他の変化：ウムラウト複数

男性名詞：古英語mann>中英語man

	<単数>		<複数>	
	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	mann	man	menn	men
属格	mannes	manes	manna	men
与格	menn	man	mannum	men
対格	mann	man	menn	men

2. 形容詞

古英語wīs>中英語wis(wise)

(i) 強変化

	男性		中性		女性	
	古英語	中英語	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	wīs	wis	wīs	wis	wīs	wis
属格	wīses	wis	wīses	wis	wīsre	wis
与格	wīsum	wis	wīsum	wis	wīsre	wis
对格	wīsne	wis	wīs	wis	wīse	wis
具格	wīse	—	wīse	—	—	—

	男性		中性		女性	
	古英語	中英語	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	wīse	wise	wīs	wise	wīsa, -e	wise
属格	wīsra	wise	wīsra	wise	wīsra	wise
与格	wīsum	wise	wīsum	wise	wīsum	wise
对格	wīse	wise	wīs	wise	wīsa, -e	wise

(ii) 弱変化

	男性		中性		女性	
	古英語	中英語	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	wīsa	wise	wīse	wise	wīse	wise
属格	wīsan	wise	wīsan	wise	wīsan	wise
与格	wīsan	wise	wīsan	wise	wīsan	wise
对格	wīsan	wise	wīsan	wise	wīsan	wise

	男・中・女性共通	
	古英語	中英語
主格	wīsan	wise
属格	wīsra, -ena	wise
与格	wīsum	wise
对格	wīsan	wise

3. 代名詞

【人称代名詞】

1 人称

	<単数>		<両数>		<複数>	
	古英語	中英語	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	ic	ich	wit	—	wē	we
属格	min	mi(n)	uncer	—	ūre	ure(s)
与格	mē	me	unc	—	ūs	us
对格	mē	me	unc	—	ūs	us

2 人称

	< 単数 >		< 両数 >		< 複数 >	
	男性		中性		女性	
	古英語	中英語	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	þū	þou	gít	——	gē	ze
属格	þīn	þi(n)	incer	——	ēower	(e)ower
与格	þē	þe	inc	——	ēow	(e)ow
对格	þē	þe	inc	——	ēow	(e)ow

3 人称

	男性		< 単数 > 中性		女性	
	古英語	中英語	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	hē	he	hit	hit	hēo	heo, she
属格	his	his	his	his	hi(e)re	hire
与格	him	him	him	hit	hi(e)re	hire, here
对格	hine	him	hit	hit	hīe	hire, here

< 単数 >

男・中・女性共通

古英語 中英語

主格 hīe hi, heo, Ðai, they

属格 hi(e)ra hire

与格 hīe hi, heo

对格 hīe hi, heo

【疑問代名詞】

	男・女性		中性	
	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	hwā	who	hwæt	what
属格	hwæs	whose	hwæs	whose
与格	hwæm	whom	hwæm	whom
对格	hwone	whone	hwæt	what
具格			hwy	

【指示代名詞】

(i) sē 'that, the'

	男性		< 単数 > 中性		女性	
	古英語	中英語	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	sē	þe	þæt	þe	sēo	þe
属格	þæs	þe	þæs	þe	þære	þe
与格	þæm	þe	þæm	þe	þære	þe
对格	þone	þe	þæt	þe	þā	þe
具格			þy			

< 複数 >

男・中・女性共通

古英語 中英語

主格	þā	þe
属格	þāra	þe
与格	þæm	þe
对格	þā	þe

(ii) Þes(this)

< 単数 >

男性

中性

女性

	古英語	中英語	古英語	中英語	古英語	中英語
主格	Þes	Þes	Þis	Þis	Þēos	Þes, Þis
属格	Þisses	Þis	Þisses	Þis	Þisse	Þes
与格	Þissum	Þis	Þissum	Þis	Þisse	Þis
对格	Þisne	Þis	Þis	Þis	Þās	Þis
具格	—	—	Þys	—	—	—

< 複数 >

男・中・女性共通

古英語 中英語

主格	Þās	Þes(e), Þis(e)
属格	Þissa	Þes(e), Þis(e)
与格	Þissum	Þes(e), Þis(e)
对格	Þās	Þes(e), Þis(e)

3. 動詞

【人称变化】

強変化動詞

古英語drīfan > 中英語driue(n) (drive)

[直說法]

[假定法]

	古英語	中英語	古英語	中英語
現在 単数	1 drīfe	driue	drīfe	driue
	2 drīf(e)st	driuest	drīfe	driue
	3 drīf(e)þ	driueþ	drīfe	driue
現在 複数	drīfaþ	driueþ	drīfen	driue(n)
過去 単数	1 drāf	drof	drife	driue
	2 drife	driue	drife	driue
	3 drāf	drof	drife	driue
過去 複数	drifon	driue(n)	drifen	driue(n)
命令法 単数	drīf	drif		
	drīfaþ	driueþ		
非屈折不定詞	drīfan	driue(n)		
屈折不定詞	tō drīfenne	to driue(ne)		
現在分詞	drīfende	driuende, driuing		
過去分詞	(ge)drifen	(i)driue(n)		

弱変化動詞

古英語lecgan>中英語legge(n) (lay)

[直說法]

[假定法]

		古英語		中英語		古英語		中英語	
現在	単数	1	lecgē	legge	lecgē	legge	lecgē	legge	
		2	leg(e)st	leggest	lecgē	legge	lecgē	legge	
		3	leg(e)þ	legþ	lecgē	legge	lecgē	legge	
	複数		lecgāþ	leggeþ	lecgēn	legge(n)	lecgēn	legge(n)	
過去	単数	1	legde	leide	legde	leide	legde	leide	
		2	legdest	leidest	legde	leide	legde	leide	
		3	legde	leide	legde	leide	legde	leide	
	複数		legdon	leide(n)	legden	leide(n)	legden	leide(n)	
命令法	単数		lege	legg, lei					
	複数		lecgāþ	leggeþ					
非屈折不定詞			lecgan	leggen					
屈折不定詞			tō lecgenne	to legge(ne)					
現在分詞			lecgende	leggende, legging					
過去分詞			(ge)legd	(i)leide					